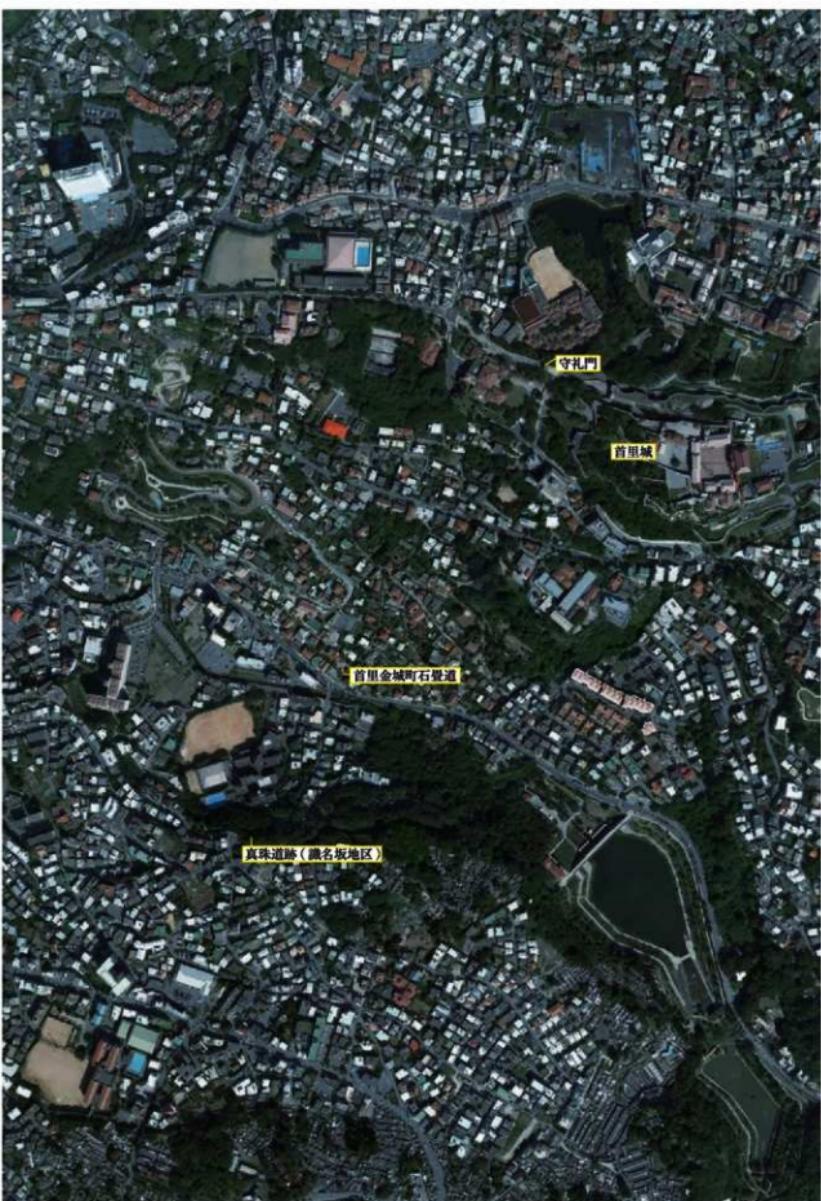


真珠道跡（識名坂地区）

—松城中学校東側線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2020(令和2)年1月

那覇市



卷首図版1 調査地周辺空中写真

写真提供：国土地理院（2009）



卷首図版2 調査区全景（西から）

序

本書は、市道：松城中学校東側線道路改良工事に伴って実施した「真珠道跡（識名坂地区）」の緊急発掘調査の成果をまとめた報告書です。

真珠道は、首里城守礼門南東脇の石門を起点として那覇港へと至る、およそ10kmの道でした。第二尚氏王統尚真王の時代に道の整備が行なわれたことが、1522年に建てられた「真玉湊碑」の碑文に記されています。交易の窓口となる那覇港と政治の中心である首里城を結ぶほか、王家の別邸である識名園への道も一部重なっており、真珠道は王府にとって重要な幹線道路の一つであったといえます。

今回調査を行なった場所は真珠道の道筋にあることは知られていましたが、現状はすでにコンクリート舗装道路となっており、その舗装の下に奇跡的に残っていた石疊を発見できたことは、大変貴重な成果となりました。また、片側が崖に接する坂であったため、当時の人々が石疊を敷設する方法に工夫した痕跡も確認できました。

本書が市民の皆様をはじめ多くの方々に地域の歴史を知る資料として広く活用され、今後の文化財保護への関心・理解に繋がれば幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査作業や本報告書作成にあたり、ご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

2020（令和2）年1月
那覇市長 城間 幹子

例言

1. 本報告書は、那覇市道路建設課による松城中学校東側線道路改良工事に伴って平成 30 年度に実施された「平成 29 年度松城中学校東側線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 発掘調査及び資料整理・報告書作成は、那覇市市民文化部文化財課の監督のもと、現地調査作業及び資料整理作業・報告書編集作業全般を株式会社琉球サーベイへ委託し、同社が行なった。
3. 卷首図版 1 の空中写真は、国土地理院発行（2009 年撮影）を使用し加筆した。
4. 第 2 ~ 4 図は、沖縄県数値地形図（2011）を使用し加筆した。
5. 第 5 図は、那覇市都市みらい部道路建設課提供の工事計画平面図に加筆した。
6. 第 6 ~ 14 図は、株式会社琉球サーベイが作成した図・写真を再構成したものである。
7. 本報告書の図・及び表に記した座標値は、世界測地系を基本とした。
8. 本報告書の図に記した方位の北は、方眼北（Grid North）を指す。
9. 第 18 図は、沖縄県公文書館所蔵の米国国立公文書館所蔵沖縄関係空中写真「沖縄（首里・識名園・浦添城址など）、1945 年 4 月 2 日米軍撮影」を使用し加筆した。
10. 第 19 図は、繁多川自治会提供の写真（撮影：板良敷朝清氏）を使用した。
11. 図版 13 下は、沖縄県立博物館・美術館所蔵の「識名坂より金城町をみる」（撮影：坂口總一郎）を使用した。
12. 図版 14 は $S = 1/5$ 、図版 16 は $S = 1/2$ とする。
13. 調査後の発掘調査速報展開催及び写真の提供には、繁多川自治会・繁多川公民館の多大なる協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
14. 本報告書の編集・執筆は、株式会社琉球サーベイの金武正紀・菅原沙香の協力を得て、天久が担当した。
15. 出土遺物は、那覇市市民文化部文化財課で保管している。

目次

序

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯 1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 2

第Ⅲ章 調査経過と調査組織 9

　　第1節 調査経過 9

　　第2節 調査組織 10

第IV章 遺構と層序 11

　　第1節 遺構 11

　　第2節 層序 17

第V章 遺物 24

第VI章 まとめ 33

報告書抄録

挿図目次

第1図	那覇市の位置	3	第1表	出土遺物集計表	25
第2図	調査区位置図	4	第2表	石豈石観察表	27
第3図	真珠道図①	5	第3表	カムイヤキ観察表	29
第4図	真珠道図②	7	第4表	中國產陶磁器観察表	29
第5図	調査区現況図	12	第5表	本土產磁器観察表①	29
第6図	調査区平面図及び縦断面図	13	第5表	本土產磁器観察表②	28
第7図	平面分割図(西側)及びオルソ画像	15	第6表	沖繩產陶器観察表	29
第8図	平面分割図(東側)及びオルソ画像	16	第7表	沖繩產陶質土器観察表	29
第9図	トレンチ配置図及びオルソ画像	18	第8表	瓦観察表	29
第10図	トレンチA東壁土層断面図及びオルソ画像	19	第9表	ガラス製品観察表	29
第11図	トレンチB東壁土層断面図及びオルソ画像	20			
第12図	トレンチA・B平面図及びオルソ画像	21			
第13図	トレンチC西壁土層断面図及びオルソ画像	22			
第14図	石豈石ドットマップ	23			
第15図	石豈石	30			
第16図	カムイヤキ、陶磁器、陶質土器	31			
第17図	瓦、ガラス製品	32			
第18図	米軍撮影空中写真	33			
第19図	1950年代の識名坂	29			
第20図	整備工事後の歩道	34			

図版目次

図版1	上：調査区遠景（北東から） 下：首里金城町石豈道から識名坂を望む（北東から）	37
図版2	上：調査前状況（西から） 下：調査前状況（東から）	38
図版3	上：当初調査区の石豈検出状況（西から） 下：当初調査区の石豈検出状況（東から）	39
図版4	上：調査区全景（西から） 下：石豈検出状況（追加部分）（西から）	40
図版5	上：石豈検出状況（追加部分）（北から） 下：トレンチA・B設定状況（東から）	41
図版6	上：トレンチA 第II層検出状況（西から） 下：トレンチA 第III層検出状況（西から）	42
図版7	上：トレンチA 東壁 下：トレンチA 東壁（白線あり）	43
図版8	上：トレンチB 石豈石の摩耗面観察状況（西から） 下：トレンチB 石豈石側面状況（西から）	44
図版9	上：トレンチB 第II層検出状況（西から） 下：トレンチB 第III層検出状況（西から）	45
図版10	上：トレンチB 東壁 下：トレンチB 東壁（白線あり）	46
図版11	上：トレンチC 西壁 下：遺物出土状況（東から）	47
図版12	上：作業風景（西から） 下：現地説明会（地域住民対象）（東から）	48
図版13	上：工事完了後状況（西から） 下：大正末～昭和初期の識名坂	49
図版14	石豈石	50
図版15	カムイヤキ、陶磁器、陶質土器	51
図版16	瓦、ガラス製品	52

挿表目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯

今回の調査は、那覇市繁多川3・4丁目地内における市道：松城中学校東側線道路改良工事に伴って実施した緊急発掘調査である。

平成29年8月、那覇市建設管理部道路建設課より市道：松城中学校東側線道路改良工事に伴い埋蔵文化財の有無を照会する文書として埋蔵文化財事前審査願が提出された。文献等調査及び現況確認を行なったところ、埋蔵文化財事前審査報告書として「申請地は掘削を伴う調査記録がなく現段階での回答は『現況不明』だが、『真珠道』にあたっており遺構が検出される可能性があるため、工事の際に随時文化財課職員の立会調査を行う必要がある」と回答した（事前審査番号29-267）。同年9月～平成30年2月の間には先行して工事開始された坂の下側の範囲において掘削の際、随時文化財課職員が立会い調査を行なっており、着手している範囲内では遺構がないことを確認した。

平成30年4月に入り、坂の中腹から頂上部手前までの範囲に工事の掘削が進行した時点で、「石畳らしきものが出ていている」との連絡を受けた。4月18日に文化財課職員による立会い調査を行なった結果、遺構（石畳）の検出を確認した。これを受け翌日4月19日付けで、埋蔵文化財事前審査報告書を『遺跡あり』とする回答を再提出した。道路建設課と遺構の保存についての調整を行なったところ、「現地は急斜面で歩道を確保するために擁壁工事が必須であり、設計変更して遺構を保護する対応はできない」との状況説明があり、緊急で記録保存調査を行なうこととなった。また、今後工事予定の坂の頂上部の範囲についても試掘調査を平行して行い、遺構の広がりを確認することにした。その後、発掘調査実施に関して調整を重ね、平成30年5月25日付けで都市みらい部道路建設課と市民文化部文化財課で埋蔵文化財発掘調査に関する確認書を交わし、執行依頼事業として着手した。

文化財保護法についての手続きは以下のとおりである。

- ・平成30年5月23日付け、那覇市長より那覇市教育長あて
「遺跡発見の通知について（依頼）」（文化財保護法第97条第1項）
- ・平成30年5月25日付け、那覇市教育長より沖縄県教育長あて
「遺跡発見の通知について（進達）」※遺跡名が「真珠道跡（識名坂地区）」となる。
- ・平成30年6月5日付け、沖縄県教育長より那覇市教育長あて
「遺跡発見の通知について（回答）」
- ・平成30年5月29日付け、那覇市市民文化部長より那覇市都市みらい部長あて
「発掘調査承諾書の提出について（依頼）」
- ・平成30年5月29日付け、那覇市都市みらい部長より那覇市市民文化部長
「発掘調査承諾書」
- ・平成30年7月4日付け、那覇市教育長より沖縄県教育長あて
「埋蔵文化財発掘調査について」（文化財保護法第99条第1項）※調査の着手報告
- ・平成30年7月30日付け、那覇市市民文化部長より那覇市都市みらい部長あて
「発掘調査承諾書の提出について（依頼）」※追加調査分
- ・平成30年7月30日付け、那覇市都市みらい部長より那覇市市民文化部長あて
「発掘調査承諾書」※追加調査分

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本市は沖縄県最大の島である沖縄本島の南部に位置しており、市域は南北約8km、東西約10kmで面積は約3.9haを測る。市内中心部はほぼ平坦をなし、それを取り巻く南北及び東に向かって緩やかに丘陵地帯が広がっている。東から西へ市内を横断するように二級河川である国場川・安里川が流れ、それぞれ那覇港・泊港を経て東シナ海へ注いでいる。

地質構造は全体として単斜構造をなすが、南側中央部においては盆状構造の断面に似た地質構造が見られ、東部ではドーム型地質構造をなす地域も見受けられる。地質は大別して第三紀中新世の島尻層、第三紀新世から第四紀洪積世にかけての琉球石灰岩及び沖積世の隆起からなっているが、西部では海浜堆積物からなるところもある。

真珠道は首里城守礼門南東脇の石門を起点として、首里金城町・識名・真玉橋を経て豊見城グスクの北東を回り、垣花・屋良座森グスクへ至る約10kmの道路である。琉球王国第二尚氏王統の尚真王代（1477～1526年）に整備が行なわれ、1522年に真珠道の起点東側に国王の徳を称える「国王頌徳碑」、西側に真珠道の整備及び真玉橋架橋の竣工を記念した「真珠湊碑」が建てられている。この時期には他にも首里の街中や首里と各地方を結ぶ道の整備が行なわれ、主要な道が石畳になったといわれている。当初の終点は那覇港沿岸である垣花までであったが、1553年に屋良座森グスクが普請されたことにより延伸された。整備の目的は倭寇などの外的勢力に対抗する際に首里から兵を通行させるためとも言われるが、交易の窓口である那覇港と政治の中心である首里を結ぶことにより、実際の活用としては生活に沿った道として利用されたようである。国王一家の保養のほか中国からの冊封使を歓待する場所となった王家の別邸識名園への道や島尻方面へ向かう道も、一部真珠道と重なっている。

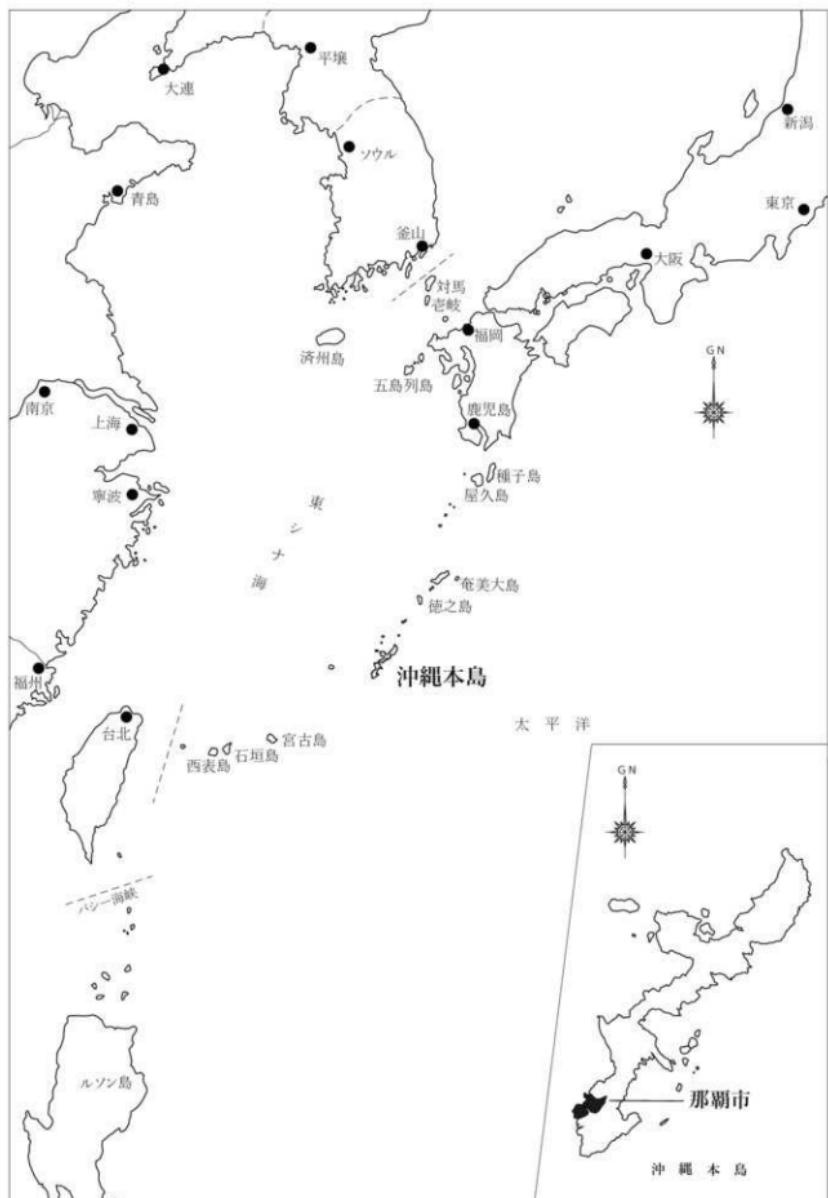
亂れ敷きの石畠や沿道の石垣が美しく残されている首里金城町石畠道は真珠道の一部であり、現在も往時の姿をとどめる文化財として県指定文化財（史跡・名勝）となっている。そのほかでは戦後の開発に伴い真珠道の石畠が残っている場所はほとんどない。しかし、現在でも道路として供用されているところが多く、その道筋を辿ることが可能である。（第3・4図）

首里台地と識名台地の間を流れる金城川にかつて架かっていた金城橋を渡り、識名台地へと登る道が今回の調査地である識名坂である。坂を上りきると真玉橋方面へ進む南の道と、識名園へ繋がる南東の道の二手に分かれている。繁多川の集落内には識名宮や神応寺跡（現在は繁多川公民館）が位置しており、古来より人々の往来が頻繁であったことが窺える。民話でも、金城川に身投げした夫婦の怨念が火の玉となって夜な夜な坂を漂うという「識名坂の遺念火」の舞台として地名が残っている。

元々は「識名平」と書いて「シチナヌヒラ」、これが転訛して「シチナンダ」と呼称していたようである。その後坂の意味を強調するためか「識名坂」と表記し、坂の方言読み「ヒラ」が付け加えられた「シチナンダヒラ」という呼称も使われるようになっている。

【参考・引用文献】

- ・『国立国語研究所資料集5 沖縄語辞典』 国立国語研究所編 1980年1月
- ・『沖縄大百科事典 中巻』 沖縄タイムス社 1983年9月
- ・『沖縄県歴史の道調査報告書－真珠道・末吉宮参詣道－』 沖縄県教育委員会文化課 1984年3月
- ・『沖縄古語大辞典』 株式会社角川書店 1995年7月
- ・『日本歴史地名大系第48巻 沖縄県の地名』 株式会社平凡社 2002年12月
- ・『令和元年度版 市政概要』 那覇市議会事務局 2019年9月



第1図 那覇市の位置



第2図 調査区位置図

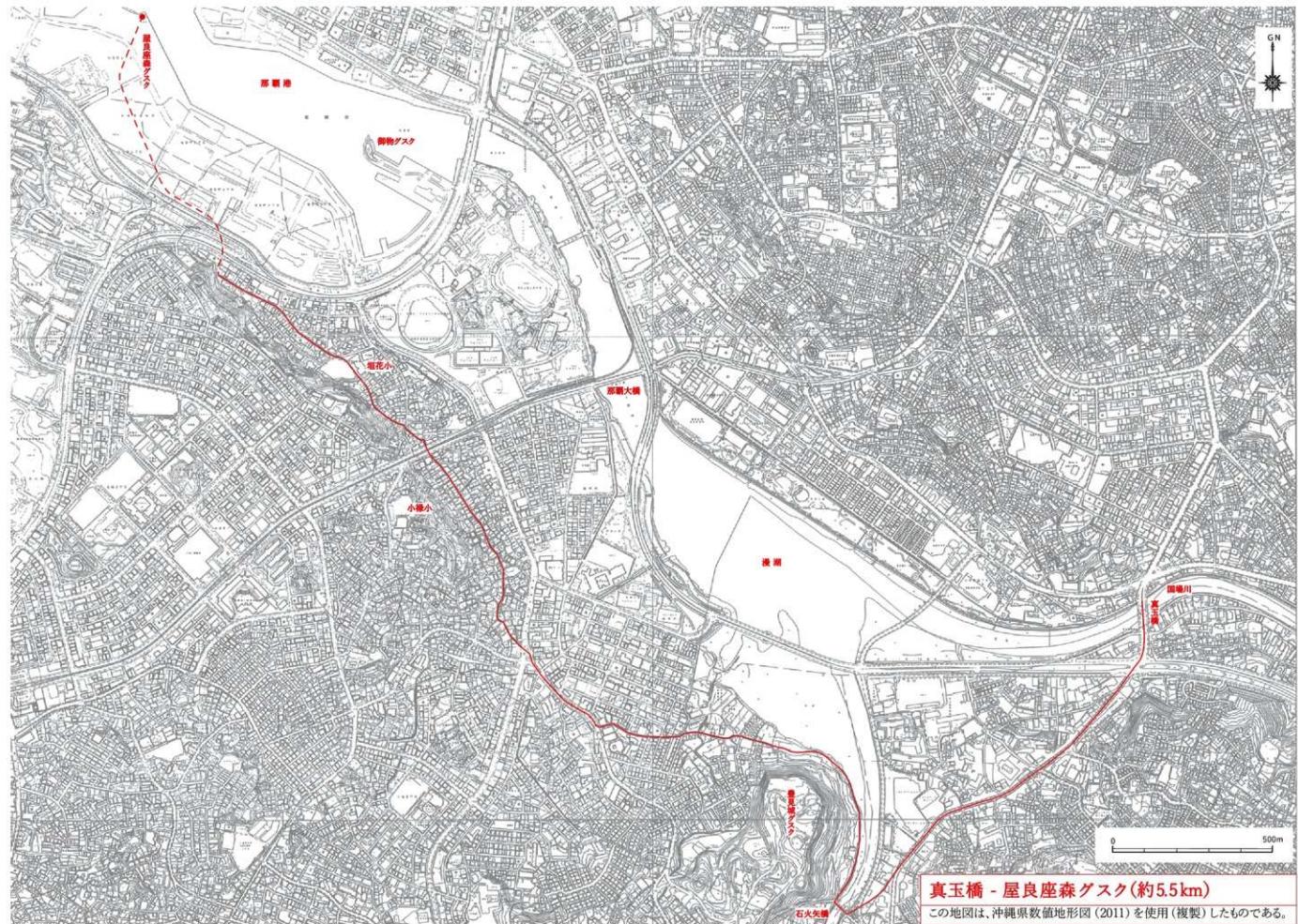
—この地図は、沖縄県数値地形図(2011)を使用(複製)したものである—



第3図 真珠道図①

首里城守礼門横 - 真玉橋(約4km)

この地図は、沖縄県数値地形図（2011）を使用（複製）したものである。



第4図 真珠道図②

第III章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

発掘調査は、2018（平成30）年7月9日～2018（平成30）年7月19日及び2018（平成30）年8月6日～2018（平成30）年8月8日の期間で実施した。資料整理作業及び報告書作成作業は、2019（令和元）年度に実施した。

調査区は工事による掘削が進んでおり、既に石疊がある程度検出している状態であったため、本調査は石疊の検出及び清掃作業から着手した。検出状況の写真撮影及び測量作業後に、比較的残りの良い部分において石疊に直交する形で横断トレーニングを2ヶ所に設定して地山まで掘削し、石疊の構築状況を記録した。また、石疊の斜面側の造成状況を確認するため、大型の石灰岩外側にトレーニングCを設定して掘削した。

調査区より東～南側、坂の頂上側の工事による掘削が未着手の範囲内において、さらに石疊が伸びていることが想定されるため、7月18～20日に文化財課による試掘調査を行なった。4箇所の試掘トレーニングのうち、最も本調査区に近いトレーニングにおいて遺構の広がりを確認したため8月6～8日に追加調査を行なった。

以下に調査内容を略記する。

2018（平成30）年7月

9日（月）調査前状況写真撮影。その後、遺構全体の検出・表面清掃作業を開始。石疊の北側で縁石を確認。石疊の南側縁は既存の配管溝により壊された可能性あり。

10日（火）台風8号接近のため作業を中止した。

11日（水）検出状況の写真撮影及び写真測量を行なった。遺構の西側下方15mほどのところに長さ約1.5m、幅約40cmの石灰岩があるが、上面が平坦でありこの岩も石疊の一部であった可能性が考えられる。

12日（木）写真測量作業。

13日（金）現場作業なし。事務所にて整理作業。

17日（火）横断トレーニングA・Bを設定し、掘削を開始。

18日（水）トレーニングC設定し、掘削を開始。トレーニングA・Bの断面写真撮影及び測量作業。

19日（木）トレーニングCの断面写真撮影及び測量作業。

仮設トイレ撤収。安全対策のため調査区をシートで覆い養生した。

2018（平成30）年8月

6日（月）追加調査区の調査開始。遺構（追加部分）の表面清掃・写真撮影。

7日（火）追加調査区の写真測量作業。

8日（水）首里金城町より調査区遠景の写真撮影。本日にて現地作業を終了した。

なお、7月18日（水）に調査地隣接の松城中学校2年生対象、8月4日（土）に地域住民対象として発掘調査の現地説明会を開催した。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下の通りである。

調査組織（発掘調査：平成30年度、資料整理：令和元年度）

事業主体	那覇市	市長	城間 幹子
	市民文化部	部長	徳盛 仁 (平成30年度)
	〃	部長	比嘉 世顕 (令和元年度)
	〃	副 參 事	渡慶次 一司
事業所管	文化財課	課長	末吉 正睦
調査総括	文化財課	副 參 事	内間 靖
調査事務	文化財課	副 参 事	内間 靖
	〃	主 査	神谷 あけみ (平成30年度)
	〃	主 査	宮里 浩子 (令和元年度)
	〃	主任 主事	前森 恵理子 (令和元年度)
調査担当	文化財課 (埋文G)	副 參 事	内間 靖
	〃	専門員主査	仲宗根 啓
	〃	〃	樋口 麻子
	〃	主任専門員	當銘 由嗣
	〃	主任 主事	島 弘 (平成30年度)
	〃	主任 学芸員	吉田 健太 (平成30年度)
	〃	主任 学芸員	安斎 真知子 (令和元年度)
	〃	主任 学芸員	天久 瑞香 (令和元年度)
	〃	学 芸 員	天久 瑞香 (平成30年度)
	〃	非常勤専門員	高良 夏枝
	〃	〃	名嘉山 美野
	〃	臨時職員	富本 文江 (令和元年度)
	〃 (開調G)	主任幹	玉城 安明
	〃	主任 主事	島 弘 (令和元年度)
	〃	主任 学芸員	安斎 真知子 (平成30年度)
	〃	主任 学芸員	吉田 健太 (令和元年度)
	〃	学 芸 員	江上 輝 (平成30年度)
	〃	非常勤専門員	徳元 剛
	〃	〃	渡辺 幸夫
	〃	〃	山道 峻

発掘調査業務委託(平成30年度)・資料整理及び報告書作成業務委託(令和元年度)
株式会社 琉球サーベイ

第IV章 遺構と層序

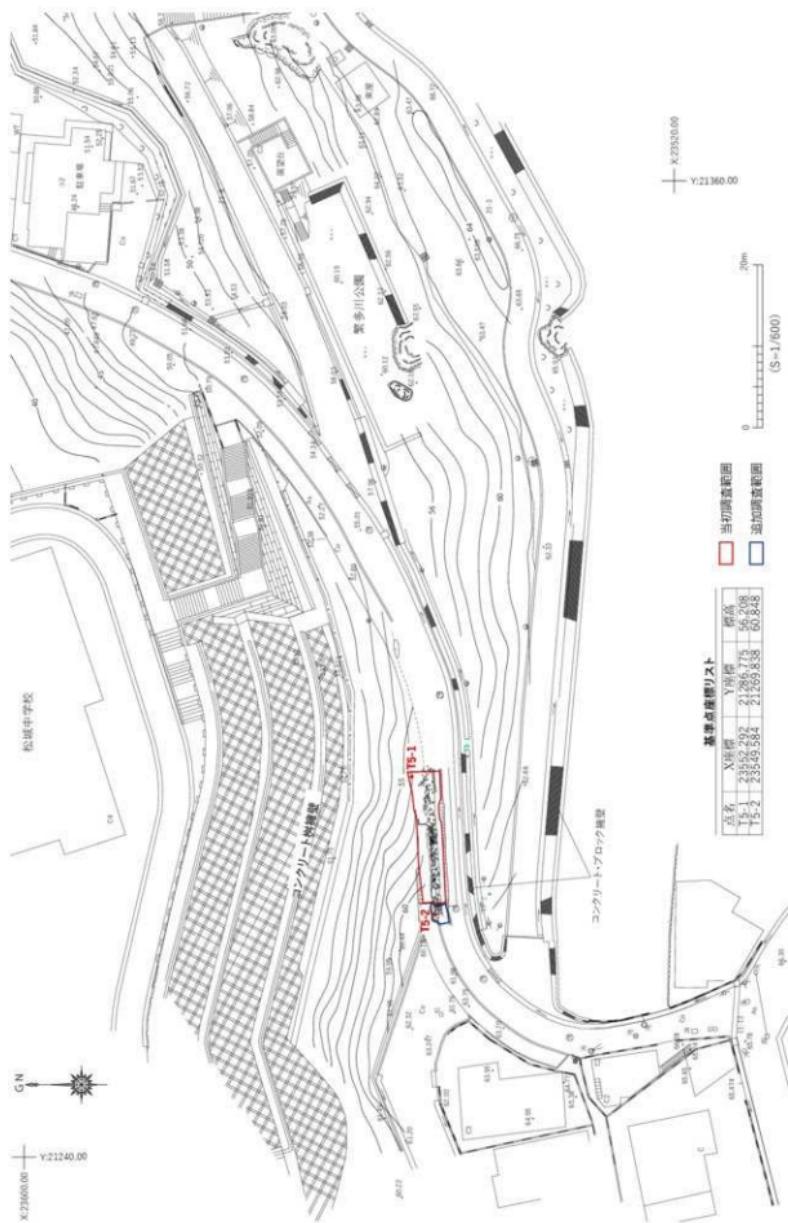
第1節 遺構

本調査にて確認した石畳は識名坂の頂上部近くで検出した。当初調査で長さ約16m、幅約90cm、追加調査で長さ約2m、幅約90cm、合計の長さは約18mになる。敷石は脱落している箇所も多く、全体として石畳の残存状況はあまり良くない。崖に面する北側では長さ1m前後の大型の石灰岩がいくつか見られ、坂の形と石の縁が繋がることから石畳の縁石であると思われる。石畳から坂の下方へ15mほど離れた地点に同様の大きさの石灰岩が1点単独で検出している。この石も位置や上面が平らで磨耗が見られる点、縁にあたる北側が直角に近い形をしている点から北側縁石である可能性があるが、間の敷石が失われているため想像の域を出ない。縁石外側には溝は確認できなかったが、これは北側がすぐ崖になっており排水溝を設ける必要があまりなかったためと考えられる。

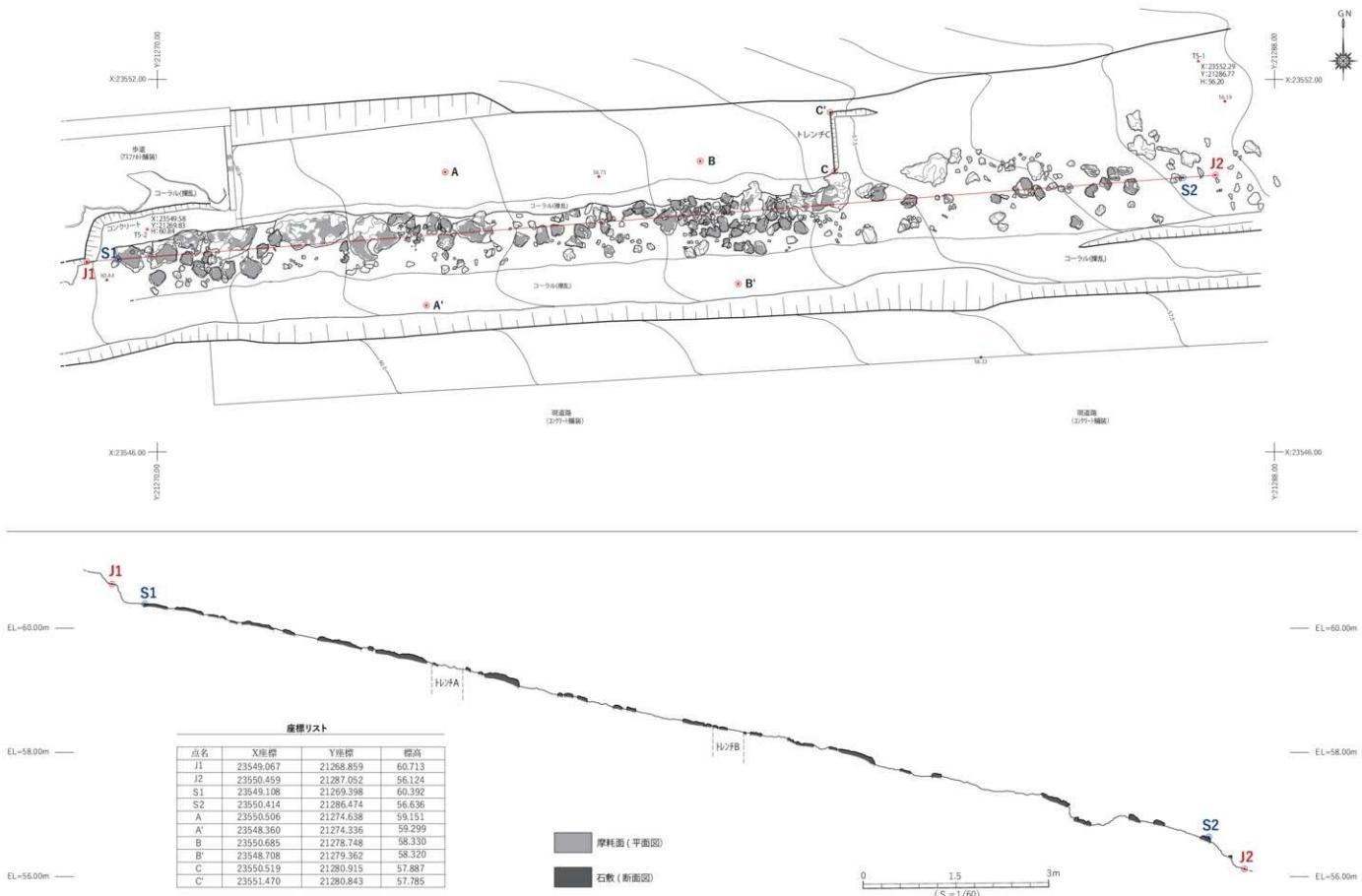
石畳の北側部分では敷石も比較的良く残っているものの、南側にいくにつれ敷石が失われている部分が多い。コーラル層との境界がはっきり見えることと合わせると南側縁は配管工事により破壊されたと考えられる。また、坂の下方である東側部分では敷石の上面が坂の傾斜に沿っていない敷石も多く、散乱したような状況のため、こちらもコンクリート舗装工事の際に大きく影響を受けたと考えられる。

敷石には前述した大型の石灰岩を除けば、20～30cmの大きさのものを主に配置し、その隙間に10cm前後的小礫を入れ込む状況が見られる。石畳の勾配は約15度あるが、段が設けられた箇所や滑り止めのための刻み加工がなされた敷石は確認できなかった。敷石の表面はいずれも平滑で磨耗が著しい。

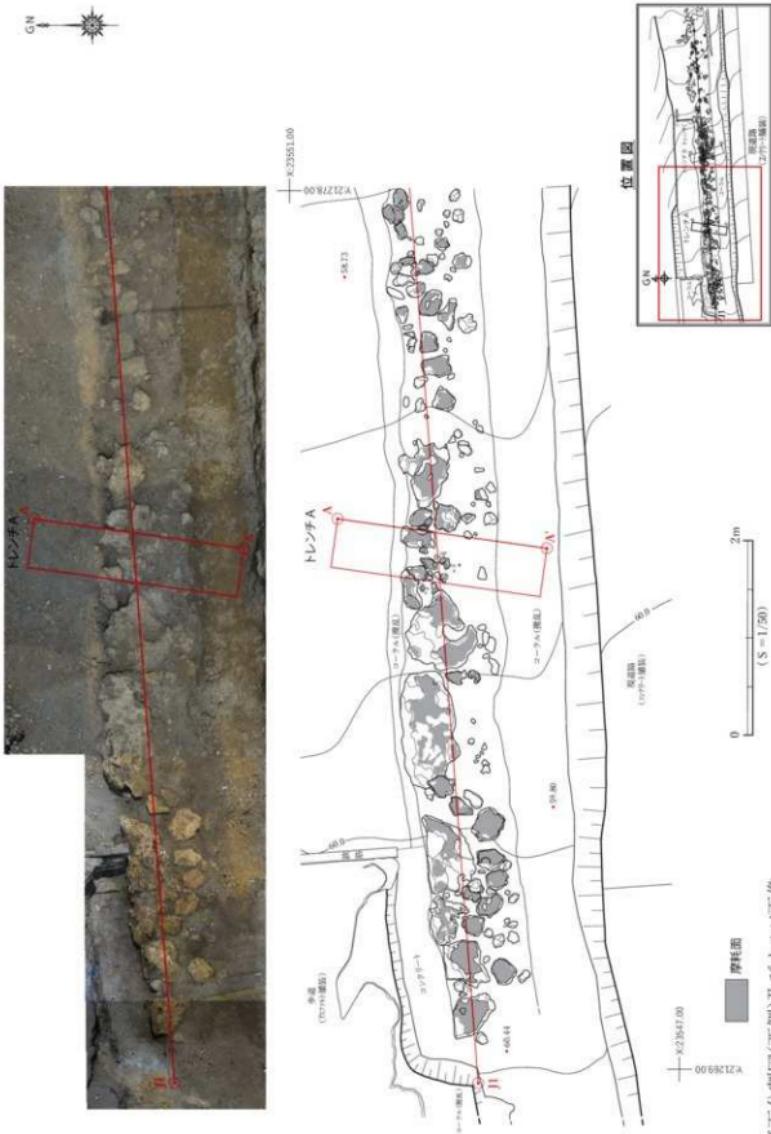
金城橋を挟んで繋がっていた同じ真珠道の石畳道である首里金城町の石畳道と比較すると、敷石の大きさや磨耗具合が似ているものの、屋敷地に隣接していない立地のためか造りが若干粗い印象を受ける。



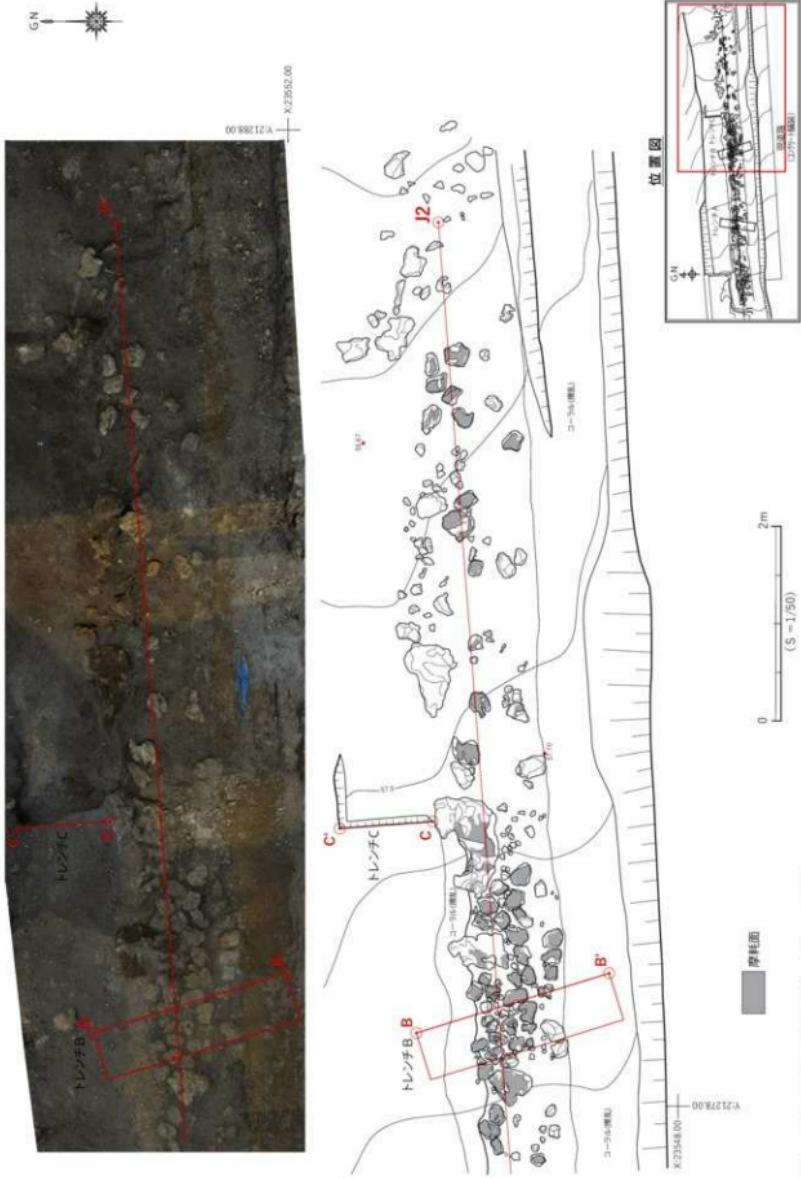
第5図 調査区現況図



第6図 調査区平面図及び縦断面図



第7図 平面分割図(西側)及びオルゾ画像



第8図 平面分割図(東側)及びオルソ画像

第2節 層序

今回の調査は、前述の通り遺構がほぼ検出された状況から調査開始しており、遺構直上まではコンクリート舗装に伴う現代の造成層となっている。そのため本章では、遺構の構築方法を確認するために設定したトレンチの層序について扱うこととする。

トレンチは遺構の残りの比較的良い箇所2地点に遺構を横断する形で設定した。(トレンチA・B)また、崖がせまる遺構の北側においても堆積及び造成の状況を確認するため、縁石と思われる石灰岩の側に遺構と直交する形でトレンチCを設定した。

トレンチA・B

第I層 石畳の敷石。表面の磨耗が著しい。表面から下向きに尖った三角錐・四角錐状の形のものが多く見られる。

第II層 敷石が舗装される層。クチャ粘土層で厚さ約10cm。10YR4/3にぶい黄褐色を呈する。

第III層 舗装の下地層。5~10cmほどの石灰岩小礫をかなり多く含む。厚さ約10cm。10YR2/2黒褐色を呈する。

第IV層 地山を地ならしした層。7.5YR5/4にぶい褐色を呈する。

地 山 基本はマージでその下は岩盤となるが、トレンチB南側でコーラルと岩盤の間にクチャ層の露出がわずかに見られる。

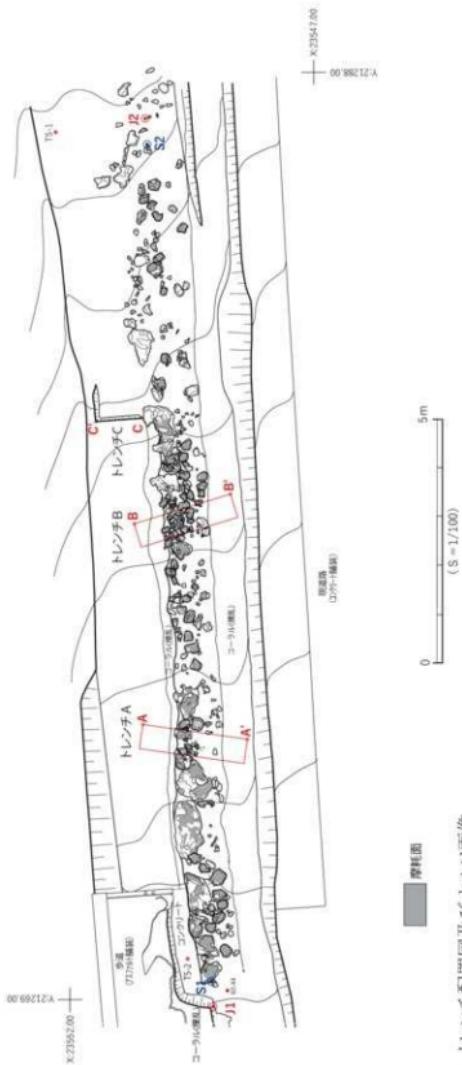
トレンチC

第1層 小さな礫やコンクリート片が混ざる客土。コンクリート舗装道路敷設時の造成層。

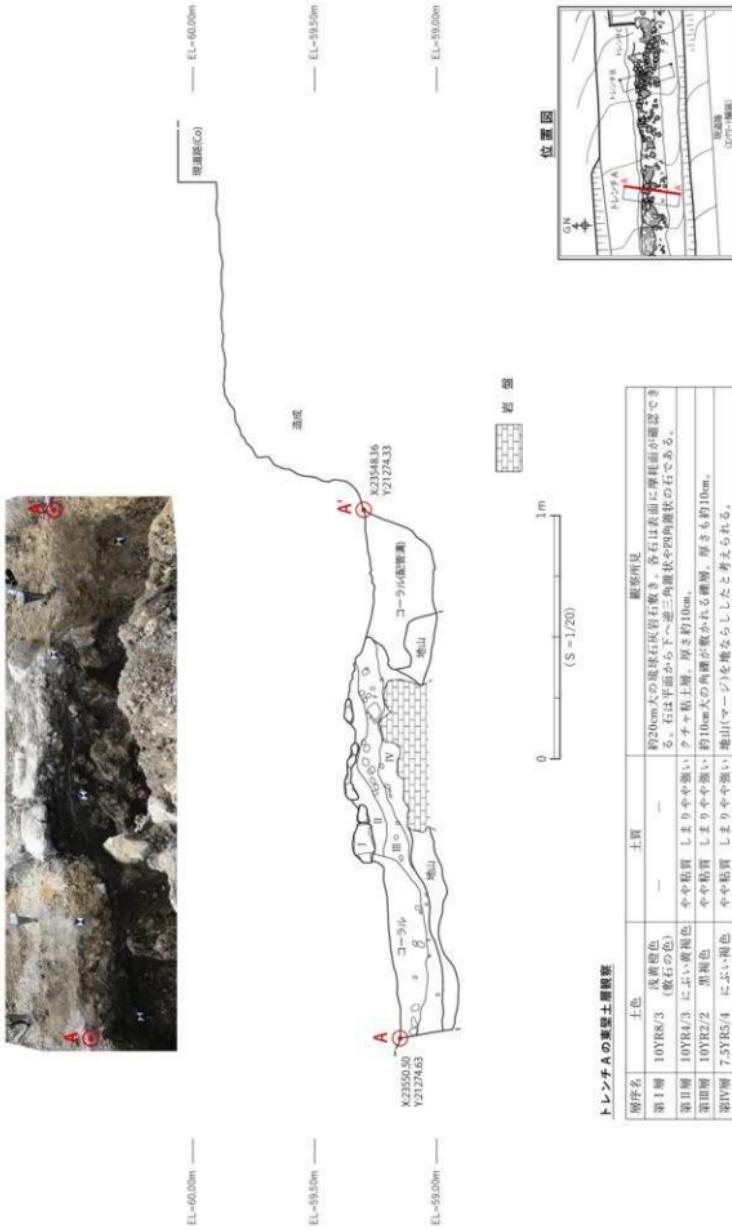
第2層 コーラル及び砂礫層。1層と同じくコンクリート舗装道路敷設時の造成層。

第3層 2~10cmの石灰岩礫が多く含まれる層。トレンチA・Bでの第III層に似ているが、それよりは全体的にしまりが弱い。石畳構築時の造成層の可能性あり。

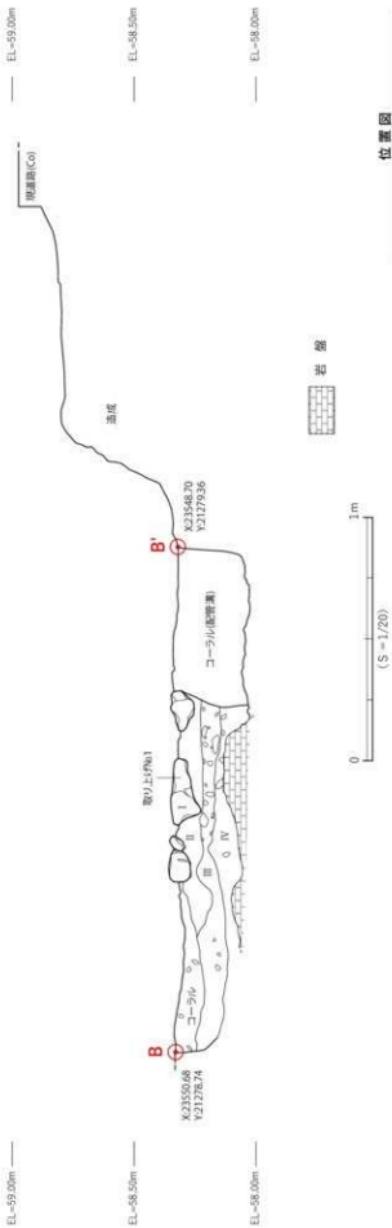
GN



第9図 レンチ配置図及びオルソ画像



第10図 トレシチA東壁土層断面図及びオルソ画像

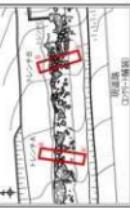
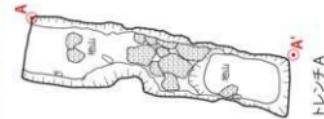
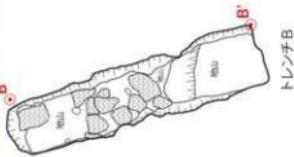


トレンチBの東壁土層概観図

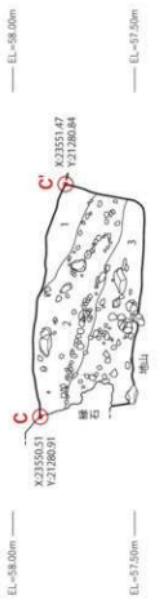
トレンチBの東壁土層概観図	
範囲所見	
第Ⅰ層	約20cm大の塊状石と灰岩石散在。各石は表面に墨筋が確認でき る。石は表面から下へ逆三角錐状や四角錐状の石である。
第Ⅱ層	チャ粘土層。厚さ約10cm。
第Ⅲ層	約10cm大の砂層が散在する。厚さも約10cm。
第Ⅳ層	地山(マージナ)を地ならししたとみられる。

第11図

トレンチB東壁土層断面図及びオルソ写真

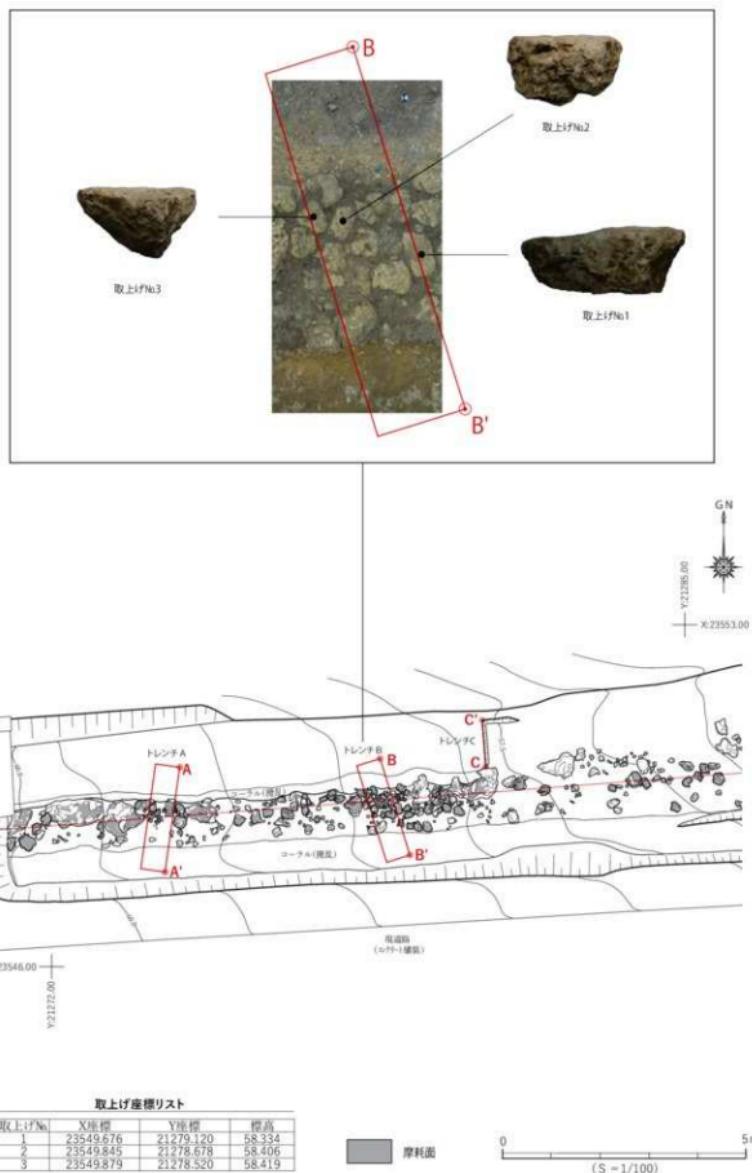


第12図 レンチA・B平面図及びオルソ画像



トレンチCの西壁土層断面図			地盤状況
剖面名	土色	土質	
1	暗褐色土層	—	客土
2	明褐色土層	—	コートル
3	黒褐色土層	やや粘質 しまりやや強い	約2~10cmの大角礫が混入している。

第13図 トレンチC西壁土層断面図及びオルソ画像



第14図 石疊石ドットマップ

第V章 遺物

本遺跡からの出土遺物は総数 97 点を数えた（第 1 表）。遺物はいずれも小片で、遺構表面清掃時の出土が 67 点と大部分を占める。遺構の下部構造にあたるトレンチでは、A から 12 点、B から 16 点出土しており、そのほとんどが敷石を敷設した層である第 I・II 層からの出土である。石畳造成の下地層にあたる第 III 層から遺物の出土はみられなかった。また、各トレンチ内から出土した遺物は表面清掃時の遺物よりさらに小さい破片が多い。

遺物の種類はカムイヤキ、中国産陶磁器、本土産磁器、沖縄産陶器、陶質土器、瓦、ガラス製品、金属製品などがみられた。それぞれの器種も含めて、出土遺物の種類はあまり多くないといえる。出土数は瓦が 50 点と最も多く、次いで沖縄産陶器 19 点、本土産陶磁器 9 点と続く。また、今回の調査では石畳の敷石 3 点を参考資料として取り上げておいた。

以下に種類ごとの概略を列記し、第 2～9 表に本書掲載遺物について個別の観察所見等を示す。

石畳石	琉球石灰岩製で、角錐を上下逆にしたような形（上面が平坦で下向きに尖る）を呈する。形が特に顕著なものを取り上げたが、他の石もおむね同様な形を呈しており、同程度の大きさの敷石で板状のものは見られなかった。いずれも上面の磨耗が著しい点で首里金城町石畳道のものとよく似ており、往時の利用頻度が高かったことが窺える。
カムイヤキ	壺の肩に近い胴部が 1 点出土。トレンチ内出土だが属する時期が異なるため石畳との関連はないと思われる。近くに位置する識名シーマ御獄遺跡からの流れ込みが想定される。
中国産陶磁器	青花の碗、朱泥の急須が 3 点出土。時期も 18～19 世紀のものと思われる。
本土産磁器	総数 9 点で碗、小碗、小杯が出土しており、肥前系の小碗胴部 1 点のみトレンチ B 内より出土している。近現代のものが多い。
沖縄産陶器	総数 19 点が出土する。施釉陶器では碗、鉢、酒注器、袋物がみられる。無釉陶器では壺、鉢、袋物がみられる。喜名焼の瓶と思われる資料が 1 点のみトレンチ A 内より出土している。
陶質土器	いわゆるアカムヌーと呼ばれる軟質の焼物。総数 3 点のうち、1 点がトレンチ B 内から出土している。器種はすべて鍋である。
瓦	総数 50 点のうち、11 点がトレンチ A・B の第 I・II 層より出土しているもののいずれもごく細片である。
ガラス製品	4 点とも石畳表面や工事造成層のコーラルから出土している。

【参考文献】

- ・那覇市文化財文化財調査報告書第 34 集 「識名シーマ御獄遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告書－」
那覇市教育委員会 1997 年 3 月

第1表 出土遺物集計表

産地	種類・分類	器形	部位	表面清掃	トレンチ A			トレンチ B			トレンチ C	追加部分	トレンチ A 西側	小計	総計	
				-	第 I・II 層	コーラル	造成	第 I 层	第 I・II 層	コーラル	3 層	第 I 层	第 I 层			
	石疊石							3						3	3	
	カムイヤキ	壺	肩				1							1	1	
中国産	陶磁器	徳化窯 青花	碗	口	2									2	2	
		宜興窯 朱泥	急須	肩	1									1	1	
本土産	磁器	肥前系	碗	口					1					1	9	
		小窓	胴	2										2		
		砥部焼	碗	頭	1									1		
		不明	碗	口 <small>～高台脚</small>	1									1		
			碗	底	2									2		
			小窓	胴	1									1		
			小杯	口	1									1		
		喜名焼	泥軸	瓶	口	1								1	19	
				碗	胴	1								1		
沖縄産	陶器	壺屋焼	施軸	鉢	胴	1								1	19	
				ガラス器 (酒注器)	胴	1								1		
				袋物	胴				1					1		
			無軸	壺	口	1								1		
				壺	胴	1							1	2		
		陶質土器	鉢	口	1									1	3	
			袋物	胴	6				2			1		9		
			鍋	口	1									1		
			鍋	胴	1			1						2		
			玉緑部		1								1	2	50	
赤瓦	丸瓦	丸瓦	端部		4									4	50	
			筒部	4	1									5		
		平瓦	端部	4	1									5		
			筒部	18	4	1			3	2				28		
		不明	筒部	3		1			2					6		
ガラス製品	貝	ガラス製品	瓶	完	1							1		2	4	
			瓶	口					1					1		
		貝	不明									1		1		
			丸釘		2									2		
金属製品	貝	ミドリイシ科 (俗称枝サンゴ)	カラマツイ科 ウツクシイ科	1										1	2	
			ウツクシイ科 ～ナタリ										1			
		ミドリイシ科 (俗称枝サンゴ)											1		1	
小計				62	9	2	1	3	10	3	1	5	1		97	
総計				62		12			16		1	5	1			

第2表 石畳石観察表

※法量はすべて「約」が付く

挿図番号 図版番号	法量				観察所見	出土地点
	長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	重さ (kg)		
第15図 1 図版14の1	28.5	13.5	12.5	6.4	琉球石灰岩を石畳面を平坦に削り、4側面を打欠して逆四角錐状に加工されている。石畳面は摩耗して滑らかになっている。	トレンチB 第1層 取上げNo.1
第15図 2 図版14の2	20.0	12.5	13.0	3.6	琉球石灰岩を石畳面を平坦に削り、4側面を打欠して逆四角錐状に加工されている。石畳面は摩耗して滑らかになっている。	トレンチB 第1層 取上げNo.2
第15図 3 図版14の3	21.0	19.0	11.5	3.8	琉球石灰岩を石畳面を平坦に削り、3側面を打欠して逆三角錐状に加工されている。石畳面は摩耗して滑らかになっている。	トレンチB 第1層 取上げNo.3

第3表 カムィヤキ観察表

挿図番号 図版番号	器種	部位	観察所見	出土地点
第16図 1 図版15の1	壺	肩部	12世紀頃のカムィヤキ壺で、器厚は約0.7cmで、内・外面は暗青灰色、芯部は赤褐色を呈する。外面は叩き締めによる打圧痕を押し引き撫で回しで消している。その押し引き撫で回し痕が幅約1.5cmで横位に残っている。内面には押圧具の格子文が残っている。	トレンチA 造成層

第4表 中国産陶磁器観察表

挿図番号 図版番号	器種	部位	観察所見			出土地点
			口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	
第16図 2 図版15の2	碗	口縁部	18世紀頃の徳化窑青花碗である。内・外面に濃青色の背景色の中に白色の花文が描かれている。これは白抜き技法である。一般的にはコバルトで文様を描くのが青花であるが、これは逆で、白い部分が文様である。口径約15.2cmの外反碗である。			表面清掃
第16図 3 図版15の3	急須	肩部	18~19世紀の宜興窯産の朱泥急須である。肩部径が約9cmで小型の急須である。素地は水練された微粒子で、暗朱色を呈する炻器質のやきものである。			表面清掃

第5表-① 本土産磁器観察表

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量			観察所見	出土地点
			口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		
第16図 4 図版15の4	碗	口縁部	-	-	-	白磁碗の口縁部である。素地を見ると中国ではなく、肥前系と考えられる。釉は透明釉で、光沢が強い。	トレンチB 第1・II層
第16図 5 図版15の5	碗	底部	-	-	5.0	内底と高台が残っている碗底部である。内底には薄い青磁系の釉が施釉されている。高台から外底は無釉。	表面清掃
第16図 6 図版15の6	碗	頭部	-	-	-	外反碗の口縁近くの小破片である。内・外面に花文の染付文。この文様は型染絵付という技法で染付られたもので、砥部焼の特徴である。	表面清掃

第5表 (2) 本土産磁器観察表

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量			観察所見	出土地点
			口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		
第16図 7 図版15の7	碗	底部	-	-	4.0	現代の磁器碗。内面は白磁釉で、外側は黒褐釉。高台の足付は無釉。	表面清掃
第16図 8 図版15の8	碗	口縁～ 高台際	11.6	-	-	現代の磁器碗である。外側の腰部から高台際に継ぎ目の描き落弁を廻らし、弁の輪郭を線描きして連弁を鮮明にしている。また、緑、茶、白色などで四角文や界線文なども描かれている。その文様の上から透明釉を内・外側に施釉している。	表面清掃

第6表 沖縄産陶器観察表

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量			観察所見	出土地点
			口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		
第16図 9 図版15の9	瓶	口縁部	7.0	-	-	徳利形瓶の外反口縁。外面に薄い泥釉(泥漿)が施釉されていることや、素地に石英が混入していることから喜名焼と考えられる。	トレンチA 第I・II層
第16図 10 図版15の10	碗	底部	-	-	6.0	素地に白化粧をした後、外面にコバルトで文様を描いてから全面に透明釉を施釉し、その後、内底釉を蛇ノ目模様取りし、高台の足付釉も模様取りて露胎にしている。壺屋の上焼碗である。	表面清掃
第16図 11 図版15の11	カラカラー (酒注器)	胴部	-	-	-	胴部径が約14.3cmで、カラカラーの最も膨らんだ部分の破片である。外面には黒褐釉が施釉されている。	表面清掃
第16図 12 図版15の12	壺	口縁部	16.5	-	-	口縁部が外反する大型壺の口縁部である。壺屋焼の大型壺の代表的器形である。素地に石灰岩粒が混入している。荒焼大型壺。	表面清掃
第16図 13 図版15の13	壺	胴部	-	-	-	胴部径が約13cmの小型壺の胴部である。素地に石灰岩粒が混入している。荒焼小型壺。	表面清掃
第16図 14 図版15の14	鉢	口縁部	-	-	-	摺鉢のような形をした大型の浅鉢の口縁部である。壺屋焼の荒焼大鉢。	表面清掃

第7表 沖縄産陶質土器観察表

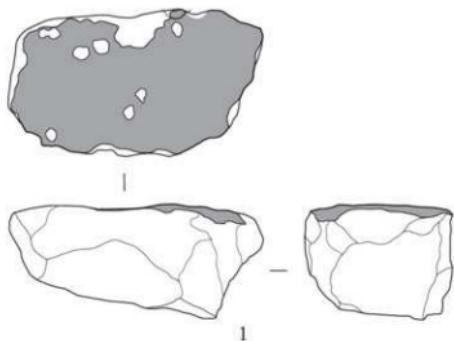
挿図番号 図版番号	器種	部位	法量			観察所見	出土地点
			口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		
第16図 15 図版15の15	鍋	口縁部	23.0	-	-	壺屋でサークーと呼ばれる土鍋である。口縁部が直角に近いぐらい外反し、その頸部に左右一对の耳が付く。無軸の陶質土器で、赤褐色を呈することから壺屋ではアカムヌーと呼ばれている。	表面清掃

第8表 瓦観察表

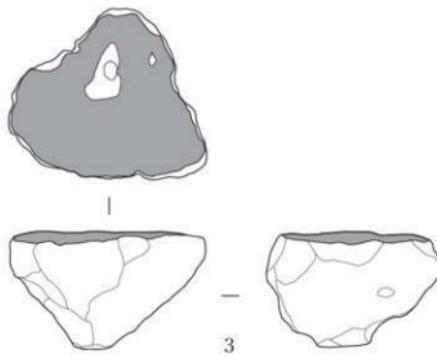
挿図番号 図版番号	器種	部位	法量		観察所見	出土地点
			厚さ (cm)			
第17図 1 図版16の1	丸瓦	玉縁部	2.2 ~ 2.5		琉球赤瓦の玉縁部の一部分である。凸面は撫で調整、凹面は桶巻きの布目圧痕があり、横位に紐圧痕が残っている。色調は赤橙色を呈する。	表面清掃
第17図 2 図版16の2	丸瓦	端部	1.5 ~ 1.8		下端部の一部分である。凸面は撫で調整、凹面は布目圧痕と、横位の紐圧痕が残っている。色調は赤橙色を呈する。	表面清掃
第17図 3 図版16の3	平瓦	端部	1.2 ~ 1.4		下端部の一部分である。凸面は撫で調整、凹面には布目圧痕が残っている。色調は赤橙色を呈する。	表面清掃
第17図 4 図版16の4	平瓦	端部	0.5 ~ 1.4		上端部の一部分である。凸面は撫で調整、凹面は布目圧痕と横位縦位の紐圧痕。側面には分割面が残っている。色調は赤橙色を呈する。	表面清掃

第9表 ガラス製品観察表

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量			観察所見	出土地点
			口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		
第17図 5 図版16の5	瓶	完形	1.0	5.8	2.0	透明色のガラス丸形小瓶である。内部に黒色の液体が固体化したものが残っている。	表面清掃
第17図 6 図版16の6	瓶	完形	1.0	6.0	1.6 × 3.0	透明色のガラス扁平形小瓶である。左右側面に縦位の溝状凹みが見られる。内部に白色の液体が固体化したものが残っている。	追加部分 第1層



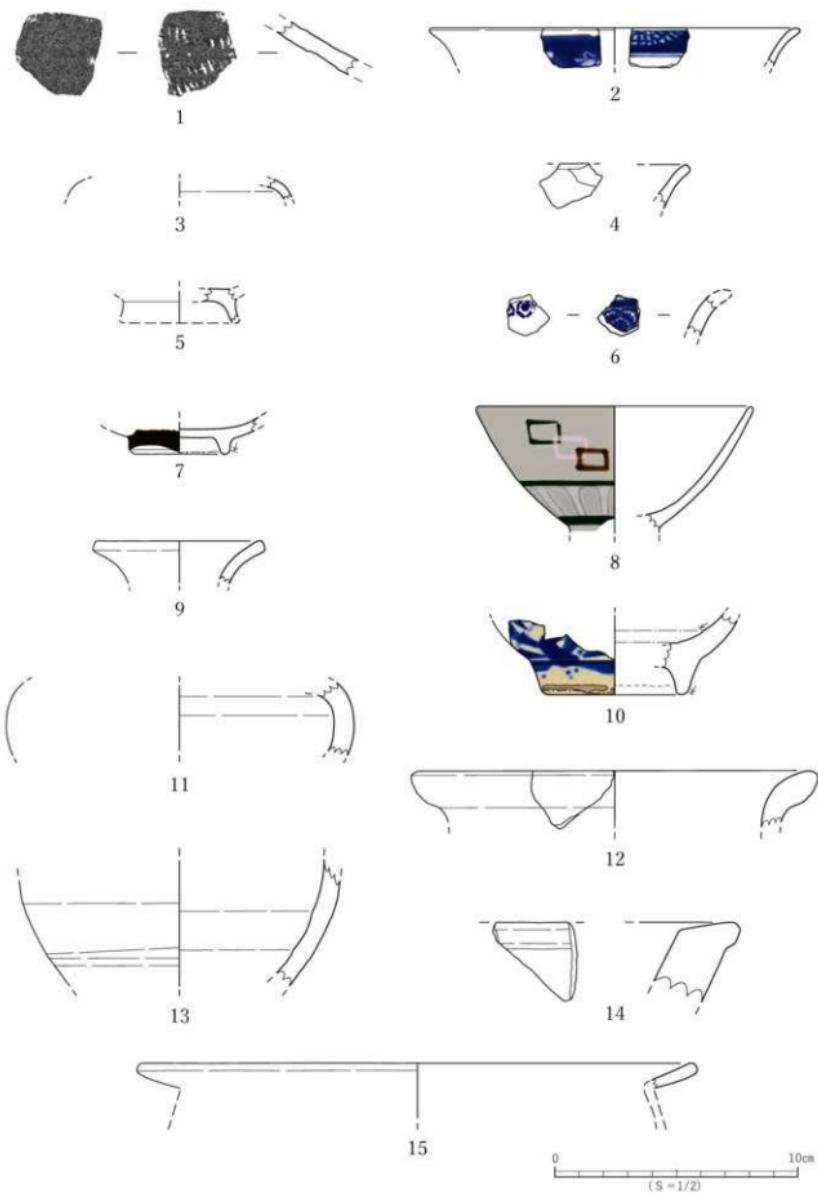
2



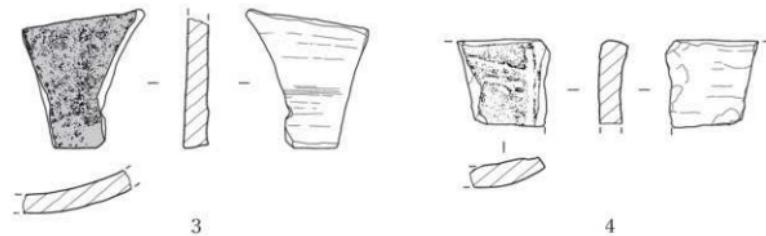
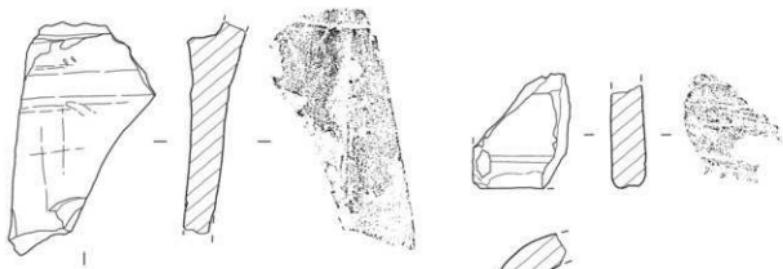
3

■ 摩耗面 0 20cm
(S = 1/5)

第15図 石疊石(琉球石灰岩)



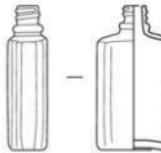
第16図 カムイヤキ(1:徳之島産)、陶磁器(2~3:中国産、4~8:本土産、9~14:沖縄産)、陶質土器(15)



0 10cm
(S = 1/3)



5



6

0 10cm
(S = 1/2)

第17図 瓦(沖縄産)、ガラス製品

第VI章 まとめ

今回の調査では、東西にのびる長さ約18mの石畳を確認した。幅は約0.9mであるものの、北側においては道の縁であると考えられる。調査区の南側は歩行用道路として供用するためコンクリート舗装のままだったため、縁石の確認はできなかった。石畳の検出状況や工事図面からすると既に配管工事による破壊を受けていると考えられる。同じ真珠道である首里金城町石畳道では道幅は平均約4mあるが、米軍撮影空中写真(第18図)や1950年代の写真(第19図)を見る限り、識名坂の道幅のほうがやや狭く2.5m前後であったと思われる。

石畳の検出状況を見ると、崖に面する北側の縁には1mほどの石灰岩がいくつか見られる。坂の下側に単体で検出された同様な大きさの石灰岩も、表面に磨耗が見られることや縁が加工されたような形状をしていることから、こちらも石畳の一部であると考えられる。これらの石は大きいものの地山の上にあり、岩盤ではないようである。風化しきれずに地山の中に残った岩もしくは転石と考えられる。北側に配置されているように見えるため、崖側の崩落を防ぐために石畳を敷設する際に運んできた可能性も考えられるが、道の一部しか確認できない現状からすると想像の域を出ない。

石畳に設定した横断トレーニング面にて下部構造を観察したところ、石畳の敷設は以下の順番で行なつたと思われる。

- ①地山を削ったり岩の上に土を入れたりしてある程度平坦にならす。
- ②拳大の石灰岩礫を敷き詰め土を入れる。
- ③厚さ10cm程度に粘土質の土を入れる。
- ④石を角錐状に加工し、尖った方を下向きにして粘土層に押し込んで固定する。

石畳を敷設する際にクチャや石灰岩礫を混ぜた土を造成土として用いることは、首里内金城村跡石畳道や大田坂(うるま市)などでも見られる。敷石の加工を板状ではなく角錐状に加工するのは、造成層に対して密着度を高め、敷石が脱落しないよう工夫



第18図 米軍撮影空中写真(1945年撮影)
〔沖縄県公文書館所蔵〕



第19図 1950年代の識名坂
板良敷朝清氏撮影〔繁多川公民館蔵〕

した方法であると考える。敷石の摩耗具合はいずれも著しく、利用頻度の高さが窺える。真珠道が整備されたといわれる 1522 年以来、多くの人々が様々な目的でこの道路を利用しており、消耗の状況に応じて道の整備が複数回行なわれたことが想定されるが、今回の調査範囲においてそうした痕跡は確認できなかった。いずれにしても検出した石畳は敷設の際に様々な工夫がみられ、その工事技術の高さと人々の苦労が偲ばれる。

今回の調査では表土掘削がなかったせいもあるが、出土遺物があまり多くない。表面清掃で出土した遺物は、近世から現代までのものが雑多に見られ、道が長期間にわたって使用されていた状況を表している。石畳の造成層からの出土数は特に少なく、造成する際に余計なものがあまり混ざらないよう意識的に造成された可能性も考えられる。

識名板はかつて道に沿って松が植えられており、眺望に富んだ場所であったという（図版 13 下）。その松は戦中に資材として多くが切り出され、残りも戦火で全て焼失している。1950 年代までは石畠が残っていたが（第 19 図）、車両通行ができるようにコンクリート舗装道路に変わった。繁多川地域では子どもの頃に石畠道を歩いた記憶を持つ方々も多く、字指定文化財として愛されている。今回も道路整備によって石畠は原位置から失われることになったが、地域からの要望によって新しい歩道の一部として石畠の敷石が残されている（第 20 図）。



第 20 図 整備工事後の歩道（北から）

【参考文献】

- ・那覇市文化財調査報告書第 16 集『那覇市歴史地図－文化遺産悉告調査報告書－』那覇市教育委員会 1986 年 3 月
- ・沖縄県文化財調査報告書第 137 集『喜友名泉石畠道・喜友名山川原丘陵古墓群・伊佐前原古墓群』沖縄県教育委員会 2000 年 3 月
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 32 集『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 年 3 月
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 42 集『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2007 年 3 月
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 48 集『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅲ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2008 年 3 月
- ・那覇市文化財調査報告書第 79 集『首里内金城村跡石畠道』那覇市教育委員会 2009 年 2 月
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 51 集『首里城跡・真珠道跡－首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009 年 3 月
- ・うるま市文化財調査報告書第 10 集『大田坂・具志川沖縄線改良工事に伴う緊急発掘調査－』2010 年 2 月
- ・金武町の歴史と文化第 4 集『町内文化財予備調査報告書－首里川周辺（平成 18～20 年度－』2010 年 3 月
- ・『繁多川 100 周年記念誌 繁多川』繁多川自治会 2012 年 6 月
- ・『ガイドブック 那覇の史跡・旧跡』那覇市歴史博物館 2014 年 3 月
- ・『宿道 41 号』一般社団法人沖縄しまて協会 2016 年 9 月
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 91 集『松崎馬場跡－県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 年 3 月
- ・浦添市文化財調査報告書『浦添城跡 外郭西地区 石畠道』浦添市教育委員会 2018 年 3 月
- ・那覇市文化財調査報告書第 110 集『那覇市内遺跡Ⅷ－首里旧金城村跡－』那覇市 2019 年 3 月

図 版



図版 1 上:調査区遠景 (北東から) ※赤丸が調査区
下:首里金城町石置道から識名坂を望む (北東から)



図版2 上:調査前状況 (西から) 下:調査前状況 (東から) ※赤丸は首里金城町石畳道



図版3 上:当初調査区の石豈検出状況 (西から)
下:当初調査区の石豈検出状況 (東から)



図版4 上:調査区全景（西から）
下:石置検出状況(追加部分)（西から）



図版5 上:石疊検出状況(追加部分) (北から)
下:トレンチA・B設定状況 (東から)



図版 6 上:トレンチA 第II層検出状況（西から）
下:トレンチA 第III層検出状況（西から）



図版7 上:トレンチA 東壁
下:トレンチA 東壁(白線あり)



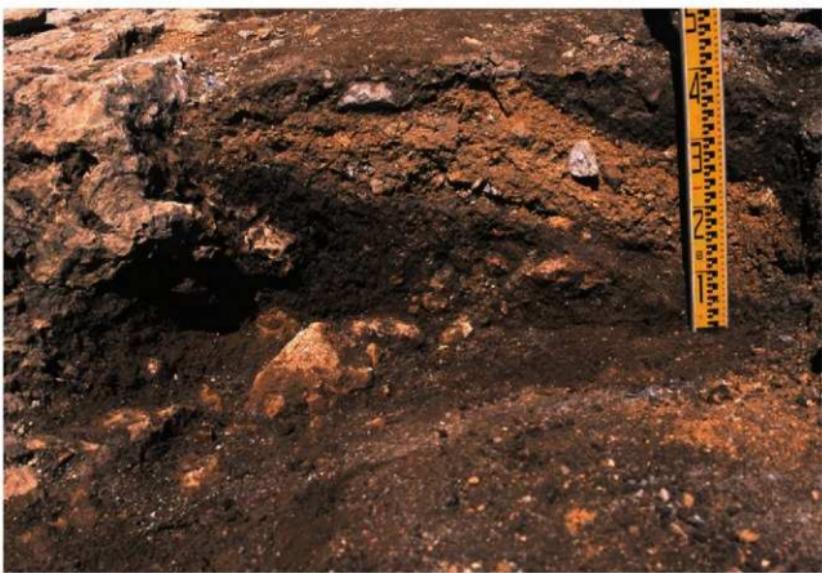
図版8 上:トレンチB 石疊石の摩耗面観察状況 (西から)
下:トレンチB 石疊石側面状況



図版9 上:トレンチB 第II層検出状況 (西から)
下:トレンチB 第III層検出状況 (西から)



図版 10 上:トレンチB 東壁
下:トレンチB 東壁(白線あり)



図版 11 上:トレンチC 西壁
下:遺物出土状況 (東から)

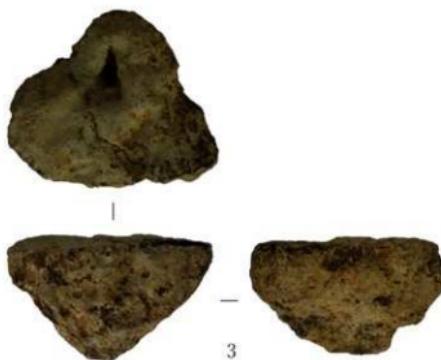
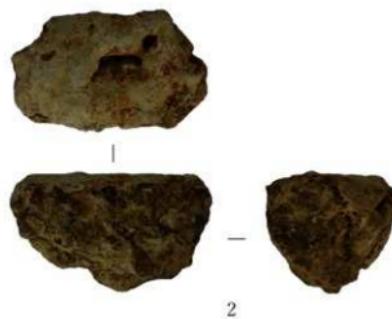


図版 12 上:作業風景（西から）
下:現地説明会(地域住民対象)（東から）



図版 13 上:工事完了後状況 (西から)

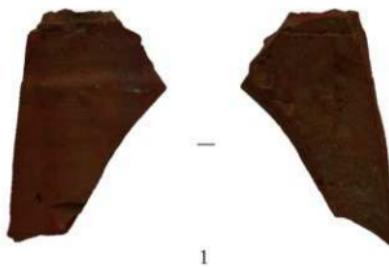
下:大正末～昭和初期の識名坂 坂口總一郎撮影「識名坂より金城町をみる」(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



圖版 14 石疊石(琉球石灰岩)



図版 15 カムイヤキ(1:徳之島産)、陶磁器(2~3:中国産、4~8:本土産、9~14:沖縄産)、陶質土器(15)
(1~6, 15 は原寸大、7~14 は $S = 1/2$)



1



2



3

4



5



6

図版 16 瓦(沖縄産)、ガラス製品

報告書抄録

那覇市文化財調査報告書第112集

真珠道跡(識名坂地区)

—松城中学校東側線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 2020(令和2)年1月17日

那覇市

〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課

TEL 098-917-3501

FAX 098-917-3523

印刷 株式会社 東洋企画印刷

〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町 4-21-5

TEL 098-995-4444

FAX 098-995-4448
